

## 解説 四君子

梅、蘭、菊、竹は君子の気品を表すとされ、中国宋代からこの四種の模様が画題にも採用されてきた。

清元の四君子は、人形の無い浄瑠璃じょうるりとでも云う、踊り手と三味線だけで演じるので、素浄瑠璃すという形式である。

演目「四君子」は、戊辰戦争という内戦を終えて、やっと安定した頃の明治三十年に初演された。明治天皇の治世を祝しており、唄は四季に沿って進む。菊水、菊慈童は、菊の仙水を飲んで長寿を得た物語である。文語調の歌詞であるが、それも風格と云うべきか。例えば、初日影の「影」とあるのは日陰という意味もあるが、何か大きなものの恩恵下にあるという意味である。

古代祭祀さいしより宣のられてきた、太祝詞ふどのりと おおはらえのことは（大祓詞）を一読されると、このニュアンスが解る。この舞台は祝い事でよく演じられる。全体を通して、祝すべき言葉が連なっているからだ。

今日においては、令和の今上天皇きんじょうを言祝ことほぐ唄と踊りである。

この演目は、新橋芸者衆の令和五年「東あずまをどり」で演じられる。尾上菊之丞が振付け、清元菊輔の指導である。筆者は新橋演舞場の棧敷から愛でよう。

令和五年五月十五日

大中臣正比呂 記